



状況を的確に整理し、 ポジティブに捉える

PwC あらた有限責任監査法人
テクノロジー・エンターテイメント部 シニアマネージャー

黒田 武志 Takeshi KURODA



2000年システムコンサルティング会社に入社。エンジニアとして業務効率化や標準化の開発・運用に携わったのち、2006年あらた監査法人（現 PwC あらた有限責任監査法人）へ入所。アソシエイトとして TMT チームに所属し監査業務に従事しながら、2007年 2次試験合格、2010年に公認会計士の資格取得。2013年に3カ月間、PwC オーストラリアのメルボルン事務所に短期出向後、2015年から2018年までの3年間 PwC ベトナムのハノイ事務所に駐在。2019年に PwC あらた有限責任監査法人に帰任し、現在は会計監査、上場支援、会計アドバイザーなどを担当。

会計監査の世界に活躍の場を移した、工学部出身の元システムコンサルタント。公認会計士として新たな道を歩み続ける黒田武志さんは、どんな状況にもポジティブに向き合う、異色のプロフェッション。資格挑戦から海外駐在まで、これまでの公認会計士としてのキャリアを振り返っていただいた。

一念発起して 公認会計士の道へ

一転職のきっかけと公認会計士を目指された理由は？

大学は、会計とはかけ離れた工学部の出身。卒業・就職の際も、コンピュータに興味があったので、システム系のコンサルティング会社を選んで就職しました。エンジニアとして業務効率化や共通化、標準化のためのプログラムを組んだり、サーバーを構築したりしていました。好きな仕事ではあったのですが、今後のキャリアアップを考え一念発起し、経験も活かしつつ、転職で新たなキャリアを構築していこう、と考えるようになりました。

転職するにあたって色々考えましたが、やはり「何か資格を取ろう」と思いました。元々数学が好きで、数字には興味があったので、公認会計士という資

格は比較的取り組みやすかったのかなと。「数学→数字→会計」という発想です。まあ、実際に勉強を始めてみて、それは大きな誤解だったと気づかされました（笑）。

一受験勉強は大変でしたか？

数学や理科の世界は、公式があつてそれに当てはめていきますが、会計は「基準を人が作る」ので、時代や国によって少しずつ内容が違ってきます。もちろん原則はありますが、ディテールまですべて覚えないと正しくできません。数学のように公式に当てはめればいいのであれば、少しは応用が利くのかなと考えていましたが、そんなことはなく、かなり覚えることが多くで大変でした。ただ、数学好きとしては「統計」だけは数学そのままです。それ以外は基本的に全部想定外でしたね。

また、公認会計士になろうと決心した頃は、ちょうど結婚を予定していた時期でしたので、妻と何度も話し合いを重ね「仕事を辞めて受験勉強に専念する」と決めました。辞めた当初の1年間は「会計士浪人」のような暮らしで、1次試験に合格するまでは決して順風満帆とはいきませんでした。妻にはかなり負担をかけたと思いますが、支え続けてくれて本当に感謝しています。

一PwC あらた有限責任監査法人を選ばれた理由は？

前職では、色々なシステムを構築するにあたって「効率化」がとても重要な要素でした。業務の標準化やテンプレートなど共通部分をいかに効率的に構築していくか、がテーマのようなものだったので、その経験を会計の世界でも活かしたいと考えていました。PwC あらたのような大手監査法人は規模が大きく、業務上のツールも共通化がかなり進んでいて、監査ツールも世界共通のものを使っています。そういう世界規模で標準化を進めている環境に身を置くことができるというところに興味がありました。

入所の際は、1次試験、今で言う短答式試験に合格した時点で入りました。本試験（論文式試験）に合格したのは、その翌年。法人の支援を受けながら資格取得ができたので、とてもラッキーだったと思います。

難易度の高い目標に向かって

一入所後のお仕事は？

試験勉強をしていた時代は「会計の世界はこうだろう」とみたいな勝手な思い込みがありましたが、PwC あらたに実際に入って仕事をしてみたら、かなりロジ



カルに仕事が進められていて、いい意味で裏切られて衝撃を受けました。入所してからアソシエイトの3、4年間は、仕事は基本的にすべて監査業務でした。上場支援もありましたが、それも監査業務の一環と考えれば、ずっと監査です。PwC あらたの監査部門は、主に金融を担当する部署と金融以外の企業を担当する部署に分かれています。私は入所以降、一貫してTMT（テクノロジー・メディア・通信）チームに所属しています。自動車や化学といったいわゆる製造業ではなく、電機メーカーのエンターテインメント子会社や、ヨーロッパの通信機器メーカーの日本販売法人とか、そういった企業の監査を担当してきました。長い間監査業務に携わっていますが、通常の監査だけに従事してきた訳ではありません。IFRS（国際会計基準）導入支援のアドバイザー業務や、プロスポーツリーグの財務アドバイザーとして各チームに財務的なアドバイスをする仕事も担当し、監査以外の、監査周辺業務も行っています。

一前職の経験は監査業務に活かされていますか？

前職では元々システム開発的なことをやっていたのですが、それに近い業種であるオンラインゲームや半導体の企業の監

査を担当しています。クライアントのビジネスに関する知識も比較的多く、経験は活かされているなど感じます。

また、監査ツールに関しては、グローバルでも日本でも、かなり力を入れて開発しているところですよ。少し前の時代ならエクセルのマクロなどを使わなければなりませんでした。最近ではITの進化もあって、PwC全体でITスキルを高め、共通化されたツールを使って業務に取り組むことができます。私も最近研修を受けたばかりですが、プログラミングのスキルがなくても、ツールを使いこなすことによって業務がスムーズになります。今後は積極的に業務に取り入れられればと思っています。幸い、私にはシステム開発の経験がありますし、より仕事に有効に活かせるのではないかと考えています。

一仕事のやりがいは何ですか？

入所当初のアソシエイトの時代から変わらず、自分の中に、常に「不正を見つけない」という目標があり、この目標達成のために努力してきました。会計処理のミスには「誤謬」と「不正」があって、意図的ではないミスが「誤謬」で、それは割と簡単に見つけられるんです。意図的な「不正」についてはまだ見つけられていません。

公認会計士として持つべき倫理観は大切にしていますが、自分自身が特別「正義感が強い」とは思っていません。不正を見つけない、と言ったのは、そのハードルが高く壁が厚いから。難しいことほど、やり遂げたいと思うタイプなので、ゴールが目に見えない方が、テンションが上がったり、モチベーションが高くなったりするのかもしれない。不正を見つけるという、公認会計士としてもっとも難易度が高い目標を掲げて、それを成し遂げる。それが、のちに監査人生を振り返った時に大きなイベントになるのかなという、漠然とした想いです。

海外で働きやすい 会計士という仕事

一海外勤務を希望されたきっかけは？

日本は“世界の中では特殊な環境だ”という思いがあったので、「機会があれば他の環境も経験したい」とずっと考えていました。「どこでもいいから海外経験がしたい」ということで、入所直後から海外駐在に手を挙げていました。最初は、短期出向でオーストラリアのメルボルンに。オーストラリアは6月決算ですので、7月からが期末の決算シーズン。そこで期末監査のサポートをしていました。3カ月の短期出向でしたが、現地企業の監査チームに入って、2社程担当しました。

日本に帰ってきて、2年程度経った時、今度はPwCベトナムのハノイ事務所に赴任しました。特にベトナムをピンポイントで希望していたわけではないのですが、たまたまハノイ事務所で1人空きが出るということで、行かせていただきました。PwCあらたに入った時から「海外経験ができる」ことは、この法人で働くメリットのひとつとっていたので、それを活かすことができました。

ーベトナムでの業務を振り返ってみていかがですか？

ベトナム・ハノイでは、ジャパンデスクのメンバーとして駐在しました。監査業務がメインではなく、営業活動や日系企業に対するエンゲージメントのフォローというのがメインでした。ベトナムでの業務は、税務の仕事が約65%、監査が約20%、アドバイザーが約15%。日本では監査部門に所属していましたが、ベトナムではバックオフィスとして、個別のサービスライン（「税務」「監査」「アドバイザー」など）には所属せずに、各サービスラインを横断的に把握し、営業活動をサポートしていました。PwCではxLoS（Cross Line of Services）と言いますが、お客さまの課題に応じて部門や組織の壁を越えてx（協働）していこうという考え方です。

現地での主な仕事はふたつ。ひとつは仕事を取ってくる、あるいは提案のタネを見つけて、それをチームに伝え提案をまとめてもらい、それを成約につなげていくという業務。もうひとつは、現地監査チームと日系企業のクライアント間でつなぎ役になり、例えば監査レポートの要約を伝えたり、あるいはクレームに対応したり、色々な場面でエンゲージメントのフォローアップをすることでした。

赴任前は、日本とはまったく異なる環境での仕事に対して、正直あまりイメージが湧きませんでした。いざ行って仕事してみると非常に楽しかったです。普段、日本でやっていた仕事とはまったく違う、例えば税務やアドバイザーなども経験できました。日本に比べると、ベトナムは全体的にまだ税法基準が曖昧なところがあり、税務当局の担当者の裁量に任されているところが結構あって、税務リスクという点では安定性にやや欠けています。進出した日系企業も、そうした税務環境に課題を持っており、我々のビジネスチャンスもそこにあるので実際にそういう企業に対してサポートし、うまくいけば喜んでもらえます。事務所内の各部署のマネジメントや現地クライアントの社長とも接点を持つこともできましたし、日本ではあまり経験したことがない初めてのことがばかりでしたが、異なる価値観の中で仕事ができただけは、刺激的で面白い経験でした。

ーベトナムという国をどう見ていらっしゃいますか？

とにかく「元気がある」という一言に尽きますね。若者が多く、伸び盛りだと思いますが、仕事面でいうと、経済規模が日本と比べるとまだまだ小さく、GDP

比で5%くらいです。ある程度規模のある大きな企業でも、日本からの受託生産企業や、労働集約型なところが多いように思いました。クライアントも大部分が製造業でしたが、それらが持っている機能も日本やシンガポールなどと比べるとシンプルな場合が多いです。だからこそ税務・アドバイザー等の経験が少ない私にも取り組みやすかったのだと思います。

また、ベトナムの人は基本的に親日です。日本人も結構たくさんいます。まあ、韓国人はその10倍いますが（笑）。ベトナムの人は韓国も日本も好きなので、私たちにとっては過ごしやすい国でした。ベトナム人を評して「謝らない」とか「時間を守らない」とか、色々な言われ方をしますが、私が出会ったベトナムの人たちは他のアジア諸国と比べてもしっかり働きますし、器用でした。友達もできたし、私は好きでしたね、ベトナムは。

ー公認会計士として海外で働くために必要なことは？

海外は当然、言語や文化が違います。では、なぜ現地で様々な貢献ができるかというと、“日本でやってきた会計や監査の知識があるから”なんです。日本で





も海外でも、公認会計士のいちばんのウリは、“会計や監査のスキルがある”ということ。国が変わっても、そこは変わらないものです。PwCの世界共通のツールが使えるという環境もありますが、公認会計士として持っている会計監査のスキルを自分の武器にすれば、海外で活躍できる。専門知識や経験を活かす場があることを、ベトナム駐在で実感しました。英語は最低限でできればいい。専門知識こそが最も重要だと思います。

—もう一度、海外で仕事をするとしたら？

またベトナムに行きたいですね（笑）。何年後かに、同じ国に行くのも面白いかなと。ただ、そのときにニーズがあるかどうかですが、ベトナムの事務所にジャパンデスクが必要なのは、日本の企業文化と現地PwCのそれとにギャップがあるケースが多いためだと理解しています。

日本流に細かいところまで手を抜かず仕上げていく、というやり方は現地では一般的でないことも多く、そういうトラブルを回避するための緩衝役、というのはジャパンデスクの付加価値の一つです。現地の日系企業がローカルのやり方を受け入れるようになれば、ジャパンデスクはそのうち必要なくなるのかもしれない。

ません。そうならないうちに、「チャンスがあればもう一度ベトナムへ」という気持ちは持っています。

—若き公認会計士にメッセージをお願いします

PwCあらたに限りませんが、現在の監査業務は世界共通のツールを使ってやっています。言語自体は日本語と英語で違いますが、作業自体は変わりません。今は、会計基準もほぼ世界共通です。一般企業であれば、それ相応の英語力が必要でしょうが、公認会計士の場合は専門知識を持っていれば英語は最低限でも構わない。そういう意味では、公認会計士の方が海外で働くハードルは、多分かなり低いと思います。これから公認会計士を目指す学生の方や、資格を取って歩み始めた若い公認会計士の方は、積極的に海外に出られたらいいのではないでしょうか。

このインタビューは2019年8月22日に実施されました。



日本公認会計士協会

The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南 4-4-1

TEL : 03-3515-1120 (代表)

03-3515-1130 (国際グループ)

<http://www.hp.jicpa.or.jp/>